

五月一〇日(水)

「瑞希さんの気持ちは分かるけど、面白いのを書くんだよ」

森田さんは、印刷して肩をダブルクリップで止めたコピー用紙の束を差し出した。それ、結局分かってないんじゃないかなと思いつつながら、渋々受け取って流し読みする。確かに引き込まれる文章な気はする。あの人の顔が過ぎつても、読み物として嫌いになり切れない。

「取り巻きっぽい二人も中々興味深いんだよなあ。特に、あの青柳さんて子？心理学部に来る京都人っぽさが、いい味になってる」

森田さんの横から、武藤さんが山積みになっている束から、青柳さん、鈴木さんの文章を引っ張ってくる。青柳さんのエッセイが効いているエッセイは、文章こそ練り上げ切っていない印象があるものの、朋子さんのエッセイと比べても、引けを取るものには思えない。

「瑞希さんは、そういう話をしてるんじゃないと思うんだけど」

後ろから、香織さんが声をかけてくれる。男どもは分かかっていないと言わんばかりの表情で、私に笑いかけてくれる。

「兄貴も康徳さんも、娘いるんですよ？ 父親としてはどうなのよ」

香織さんの問いかけに、武藤さん、森田さんは腕を組み、難しそうな表情で上の方を見る。武藤さんの方が先に口を開いて、「うくん、人生経験と思えば、そういう困難があつてもいいかなあ、と」と答えた。それを聞いていたらしい森田さんは、「そういう見方もありますね」と同調しながらも、「僕は、瑞希さんみたいな娘に育つて欲しいなと思いますよ」と言った。

「作家の子、クリエイターになりたい子が真つ直ぐすぎるのも変な気はしますけど」

「陽菜がそういうテクニク、駆け引きに走る娘にはなつて欲しくはないなあ」

武藤さん、森田さんはお互いの顔を見合わせ、同時にゆっくり大きく頷いた。

「でも、明子さんとは会ってるんだろ？」

武藤さんは自分のスマホを持ち出しながら言う。

「瑞希さんはいい娘だったって、俺も聞いてるし」

彼はメッセンジャーを開いて、明子さん、哲朗くんのお母さんとのやりとりをグツと突き出してくれた。武藤さんはスマホを机の上に戻しながら言う。

「他の娘より、一步も二歩も先んじてるんじゃない？」

「哲朗くんなら、身持ちも堅そうだし」

何かの弾みで間違いを犯す人なら、私も苦勞はしない。香織さんは「でも、アレぐらいの男の子なら、その時はその時よね？」と横槍を入れる。

「聖人君主でもないんだし、据え膳食わぬも、私は嫌かなあ」

何をやっても暖簾に腕押し、靡くことのない安全物件というのも、面白みに欠ける。駆け引きの面白さ、揺さぶる楽しさぐらいは確かに欲しい。それも分かる分かるけど、と香織さんに視線を送る。彼女と視線が落ち合うと、「あ、ごめんなさい」と舌を出して謝った。

「いやあ、青春だなあ」

森田さんは腕を組んで、しみじみと呟いた。そんな森田さんに、隣にいた武藤さんが「森田さんはまだ、羨ましいって歳じゃないでしょ」と突っ込んだ。それを見ていた香織さんまで、楽しそうに笑っている。

大人たちは他人事だと思つて、やいのやいのと談笑している。こっちは本気で相談するのに、なんだかなあ……。自分で答えを出さなきゃダメなのは分かっているけど、どうしたものか。悩みは晴れないまま、刻一刻と時計の針は進んでいく。

初出 令和三年五月一四日 noteにて公開